

ミカンを守る カンキツグリーニング病について

カンキツグリーニング病は、媒介虫であるミカンキジラミや接ぎ木によって感染し、感染したミカン樹は半年から数年のうちに枯死してしまいます。

本町では、平成15年に確認されて以降、約200本の感染樹が住吉、瀬利覚、知名、正名、上平川（一部）で確認されており、これらは持ち主の了解を得てすべて伐採処分をしています。

カンキツグリーニング病の予防策としては、「接ぎ木を行わない」「媒介虫ミカンキジラミを薬剤散布により殺虫防除する」などの方法があります。現在、早期発見を目的として年2回の調査が行われており、疑わしい症状の見られるミカン樹からは、葉を数枚採取し検定を行い感染樹を特定しています。なお、検定の結果までには2、3か月を要し、感染が確認された樹の持ち主にのみ連絡をします。

カンキツグリーニング病の蔓延防止には、早期発見による伐採と薬剤散布による予防しか有効な手立てがありません。町が行う調査や防除作業に対する町民の皆さんのご理解とご協力をお願いします。

カンキツ類の苗木等は、植物防疫法により島外への持ち出しが禁止されていますので、ご注意ください。

【お問合せ先】農政課 内線176



沖泊海岸の大型有孔虫化石密集層と大津勘のビーチロックが県指定文化財〈天然記念物〉に指定されました！

沖泊海岸の大型有孔虫化石密集層

大型有孔虫は一般に亜熱帯～熱帯の沿岸浅海域に生息している単細胞生物の一つのグループです。有孔虫は、25万種が知られており、砂浜でよく見られる「星砂」も有孔虫の仲間です。ほぼ単一の大型有孔虫の密集した層として、約6,000～3,000万年前に生息したヌムリーテス（貨幣石）の地層が世界各地から報告されていますが、比較的若い第四紀（258万年前～現在）において、ほぼ単一の大型有孔虫化石が密集する層は世界的にも少なく、オパキュリーナ・コンプラナータが大部分を占める沖泊海岸の大型有孔虫化石密集層は、その意味で大変貴重な場所です。沖泊海岸の露頭は、約90万年前にサンゴ礁が形成され始めた頃の琉球列島の位置関係・地層・岩石の変化や沖永良部島の隆起沈降の歴史を知る上で極めて重要です。



大津勘のビーチロック

ビーチロックは、熱帯から亜熱帯のサンゴ礁が発達する砂浜にみられる石灰岩です。砂（有孔虫殻やサンゴ）などが炭酸カルシウムなどのセメント物質により固まったものです。縄文時代頃から比較的新しい時代まで形成されています。大津勘のビーチロックは、長さ約200m、最大幅約20mと琉球列島の中でも際立って規模が大きく、琉球層群の石灰岩と接していることから沖永良部島の最近の地層・岩石の変化を学ぶ場所として極めて重要です。



文化財は、私たちの大切な遺産です。化石の採取や文化財指定地への車の乗り入れ等は絶対におやめください。

【お問合せ先】生涯学習課 電話81-5151